

自然主義者がいることも確かであり、今後いかなる反論が構築されるか、継続して考察する必要がある。

ところで、ヒックが心脳同一論と随伴現象論とに反対して本来の意味での心脳二元論を採用すると言うのであれば、それがデカルトの二元論に立ち返るものではないかという疑問や批判が当然生じる。ヒックもまたこのことを自覚していて、自らの立場が「非デカルト的」であると主張し、心脳の相互作用は「自然の諸法則」にしたがって生じると述べている。つまり、物質だけでなく心的・精神的なものを含む「自然」概念を提起するのである。しかし、その内容がより具体的に明らかにされない以上、新しい「自然」による解決も、「松果腺」のそれと何ら変わらないであろう。なぜなら、どちらも本来は物的であると想定されているものを、後から心的なものを担うように規定し直しているだけだからである。物と心の原初的な不可分性を踏まえずに構築された心脳二元論は、随伴現象論であれヒックの二元論であれ、「非デカルト的」であることなどできないのではなからうか。

日本における「宗教を精神医学からみる研究」の視点の諸相

大宮司 信

本論考は、これまでの日本における「『宗教を精神医学から見る研究』の視点」(以下「視点」)を、精神医学の方法と治療

という軸から瞥見し、宗教学からのありうべき批判をふまえ、筆者なりの今後の方向を展望するものである。

精神医学の方法論からの「視点」は一つの還元論であり、宗教一般を病理性に結びつけて解釈するとしてしばしば批判されてきた。一方方法論からでなく、精神医学と宗教に共通する癒し・治療の面から「視点」を据えていく方向がある。この場合、精神の病気の病理論・疾病論の基盤が治療論にあると考えるのが筆者の出発点である。

古代ギリシヤでは、生きること、生は一つの言葉ではなく、ゾーエーとビオスという二つの言葉によって表現されるとアガンベンを紹介している。本論考に引き寄せた筆者なりの踏み込んだ理解を、WHOの健康という概念、well beingに関連させて考えると、ゾーエーとは「意味を見いださなくとも、とりあえず生きること」、すなわちわれわれだれもが持っている生命の営みとしての生であり、beingに関連すると考え、ビオスは「意味を見いだして生きる」という意味合いの生で、well beingに関連すると考える。

精神医学は医学の一領域であり、well beingで示される健康の保持・強化が目的であることはいうまでもない。しかしビオス、すなわち筆者の表現する「意味を見いだして生きる」生よりも、「意味を見いださなくとも、とりあえず生きること」、すなわちゾーエーとしての生により志向し、また志向すべきであると考ええる。

またその方法も宗教に比べ、あえて強調すれば、よりゾーエー志向的と考える。すでに周知ではあるが、精神療法を例にと

って、精神医学と宗教の治療や癒しの対比をみてみたい。

精神療法においては、一般にある種の心的境地を獲得すること(洞察と呼ばれることがある)が、治療的な効果をもたらすとされる。臨床の言葉で表現すれば、「今まで見えていなかったものが見えてきた」といった、ごく平易な言語表現をとる。同じことはもちろん宗教でも起こるが、獲得された心境はより練られた言葉で語られるであろう。

しかし、さらによく精神療法を考えてみると、そうした洞察を自ら獲得する体験の基礎となる対話、さらには対話の中で声を出すこと(そこには叫びや泣き声も含まれよう)に治療的な機序が大きく関連すると考えられており、精神療法では重視される。そしてこの体験は筆者的には優れてゾーエ的な性質を持つと考えるのである。

精神医学は、生のビオスの側面の発展を第一に目指す領域では原理的ではない。あくまでゾーエとしての生を大事にすることが基本姿勢である。一方人間は自らの価値・目的を持つて生きることに、すなわちビオス的に生きることをまた目的とする。この二つの生を前提にし、治療と癒しという共通の場から宗教と精神医学を考えていくことが、今後の「視点」の一つになりうると思う。

プラグマティズムとしての専修念仏

菱 木 政 晴

一 高木顕明の『余が社会主義』

大逆事件に連座させられて獄死した高木顕明が『余が社会主義』という一文を残している。本発表は、この『余が社会主義』のテキスト解釈にプラグマティズム思想を活用しようという試みの一端を紹介しようというものである。

二 プラグマティズム

プラグマティズムは、宗教的な問題について、たとえば、神の存在の有無というような問題について、それを観念論的に論ずるのではなく、科学的実証主義によって論ずるのではない。生活のうえでの有用性、思想の道具としての有用性から論ずる。

三 プラグマティズムとしての専修念仏

第一のレベルとして、浄土教は仏教のプラグマティックな展開だと考えられる。『余が社会主義』には、「余は極楽を社会主義の実践場裡であると考へて居る」とあるが、仏教を苦悩の解決法として考えた場合、浄土教は、個人の内面に平和と平等を達成するのではなく、平和と平等の功德に満ちた阿弥陀如来の願の酬報として立てられた極楽世界へ往けば、そのような功德が備わると考える。これは、効果を重視するプラグマティックな態度である。ただし、このレベルにおいて、現実社会の平和と平等にただちに有効な方法は見出されない。